

地域づくり表彰

久山町（福岡県久山町）

地域交流型シェアオフィスそらや ～空き家からはじまる、小さな幸せ～

福岡県久山町

町長

西村 勝



1. 久山町の概要

久山町は、福岡県福岡市の東に隣接する人口は9,321人（2022年8月末時点）の町です。半世紀にわたり、「国土・社会・人間の3つの健康づくり」をまちづくりの基本理念に掲げ、「健康社会」の実現を目指したまちづくりに取り組んできました。行政と町内開業医、九州大学久山町研究室が連携して始まった健診事業は「ひさやま方式」として世界に知られており、医学の発展に大きく寄与しています。また、日本が高度経済成長期の頃、町域の97%を市街化調整区域に指定して急激な開発や人口増加を抑制し、豊かな自然や田園風景を守り継ぐなど、全国的にも珍しいまちづくりを展開してきました。



久山町全景

2. 活動開始の背景・経緯

人口減少・高齢化が加速する中で、全国で増加している空き家が社会問題となっています。これまでの移住・定住促進策は、移住者に合わせた支援を行っていましたが、「人口が増えることが、本当に地域の幸せなのか？」という疑問が浮かんできました。地域住民の皆さまが抱く不安や抵抗感などを解消し、移住者を受け入れる風土をつくっていくことが不可欠であると感じていました。

そこで本町では、地域のニーズからアプローチする、逆転の発想で事業を展開していくことにしました。

具体的な手段として、地域の活性化に必要な「人・賑わい・仕事」の3つの要素を生み出す仕組みづくり

を行うことを目的に、拠点づくり（ハード面）だけでなく、地域との交流を進めていく機会づくり（ソフト面）を融合した「地域交流型シェアオフィスそらや」を行政が開設し、管理運営を行いました。地域の活性化につながる企画と運営、その他活動をオフィス利用者と行政が一体となって展開しています。



地域交流型シェアオフィスそらや 外観

3. 行政がつなぎ役の運営モデル

オフィス利用の申請時は町が利用者の面接を行います。利用の条件には、「久山町が好き」「地域交流に前向き」「地域活性化につながるビジネスを展開する意向がある」の3つを挙げています。また、地域にとって身近な場所となるよう住民の理解を得ていくことを大切に、施設の開設前から後に至るまで、事業（講演会や改修ワークショップの実施など）を進めてきました。

4. 「そらや」の活動

オフィス利用者は、利用者全員で「そらや利用者の会」を結成し、利用開始時から多くの交流機会を自発的に設けています。

1) そらや交流会

定期的に地域の方と一緒に食事などを囲み、会話を楽しむ交流会を開催しています。



そらや交流会の様子

2) そらやマルシェ



そらやマルシェのチラシ

「非日常を、日常に」をテーマに、茅乃舎料理長の料理講座や餅つきなどの体験を含むマルシェを開催してきました。現在は、音楽会やお茶会など、地域はもちろん、町全体を対象に交流イベントを開催しています。

3) そらや通信



そらや通信 2021年6月発行

利用者自身のことや活動内容を少

しでも多くの町民に知ってもらおうと、定期的に「そらや通信」を発行し、所在地域の全戸にあたる約 400 戸に利用者が手分けしてポスティングしています。

「交流」において大切にしている視点は、「楽しみ」を共有することです。それが人と人の距離を近づける一番の近道だと考えています。

5. 「そらや」の広がり

利用者の活動は、そらやの中だけにとどまらず、地域行事や町の事業にも積極的に参加するなど、活動の領域を町全体に広がっています。利用者の町への愛着が深まったことで、町の課題解決に向けて、さらなる人材を呼び込む「つなぎ手」になっています。

現在は、教育や福祉、産業分野などに広がっており、その事業の仕組みは、今後他自治体等への活用も含め検証が進んでいます。

1) チャレンジを後押し

幅広い世代の新しいチャレンジを後押しする機会も生んでいます。80代で結成される地域の「マスク女優」は短編映画祭に自作の短編映画を応募し、金賞を受賞しました。また、自身の経験を生かしてバーチャル観光を開催してみたい、子どもの見守りができる図書館を開きたいなど、利用者に起業の相談に来る方が出てきました。



映画制作に取り組む様子

2) 地域資源にスポットをあてる

そらや近くの遊休農地を活用した畑作業が始まりました。その畑で採れた野菜は地元のカフェやパン屋で使われています。また、町の農産物をつかったお菓子などをマルシェや町のイベントなどで販売しています。



出張「そらやワゴン」の様子

利用者がつなぎ手となり、町の養蜂場（久山産蜂蜜）と福岡市内の老舗ホテルとが連携した新商品を開発、販売するなど、地域資源の新たな販路開拓にも広がりを見せています。



新商品「グランドハニー」

6. 「そらや」の成果

1) 地域住民の協力

利用者が不在の間、そらやの庭の手入れ（草抜きや花植え）を地域の方が自主的に手伝ってくれています。



季節の花が彩るそらやの庭

その活動は、駐車場からそらやまでの沿道にも広がっています。そらやがイベントを開催するときなどは、積極的に声かけもしてくれます。何より、昨年の忘年会（2021年）で地域の方からいただいた、「1年もしたらみんなおらんくなると思った。もう3年もなるとやね、早かね。」という言葉。最高の褒め言葉です。

2) 各種業界・メディアからの注目

地域との交流活動が共感を呼び、行政や各種団体、特に民間企業の間で話題となり、多様な分野から300名以上の方に訪問いただきました。新聞・テレビ等メディアにも多数掲載いただいています。また、空き家を町に寄附した方も東京から見学に

来られ、自分の育った家が地域に貢献する家として活用されていることを大変喜ばれていました。

3) 空き家の利用が増加

利用者の中から空き家等を活用した起業者が1名、2拠点居住者が1名生まれました。そらやが所在する地域への移住者や空き家情報の問い合わせが増加しており、移住ニーズの高い地域となっています。

実際に移住した方の中には、そらやのような拠点をつくりたいと自宅に交流スペースをつくった方もおられます。2015年時点でそらや所在地域（猪野地区）で23件確認されていた空き家のうち、19件が解消しています。

7. 「そらや」の思い

地方では、人口を含め「数」が豊かさのモノサシになっています。そのため、数を補うことばかりに目を向けてしまいがちです。そうした中で、大切だとわかっていても「人づきあい」や「手間」が面倒なこととして、片付けられてしまいます。

そらやの取り組みは、「人」と「人」が顔を合わせ、話をして、笑いが生まれる。シンプルに、「人づきあい」を続けた結果です。手段ではなく、「思い」から始まる地域づくりは、人を集め、行動を変え、さらには心の豊かさにもつながることがわかりました。デメリットをメリットに変える大きな可能性を秘めています。

8. 課題と展望

オフィス利用者と行政が定期的に利用することにより施設の開放日などを設けていますが、地域の交流拠点としてさらに活用を推進していくには、収益性を保ちながら施設運営を行う組織や団体等をつくる段階にきたと捉えています。

今後は、公共施設の管理運営をビジネスにも結びつけていくことで、持続可能な事業形態を生み出し、継続的に地域の活性化に寄与することを目指します。